

巻頭特集

下北ジオパーク

平成 28 年 9 月 9 日、下北ジオパークが日本ジオパークに認定されました。
これは、地域の皆さんの熱意から生まれた様々な取り組みが実った結果と言えます。
本特集では、下北ジオパークの見どころや認定までの道のりをご紹介します。

ジオパーク

ジオパークとは、地球・大地を意味する「ジオ」と「パーク」(公園)を組み合わせた言葉。とはいえ、地球や大地のことだけを学ぶのがジオパークではありません。人々の暮らし(ヒト)と自然(エコ)が、大地(ジオ)と深く結びついていることを学び、楽しむことができる場所のことを指します。

現在、日本には 44 のジオパーク(令和元年 9 月現在)があり、それぞれが地域ごとの特徴を活かした持続可能な地域づくりに取り組んでいます。

写真：中野沢段丘崖

日本のジオパーク一覧

- ：ユネスコ世界ジオパーク
- ：日本ジオパーク





海と生きる まさかりの大地

下北ジオパークを 盛り上げる人たち



下北ジオパーク ガイドの会設立

平成 31 年 4 月に下北ジオパークガイドの会が設立されました。下北ジオパークの景色や魅力を楽しく、正しく伝えるためには、ガイドの力が必要不可欠です。

研究活動

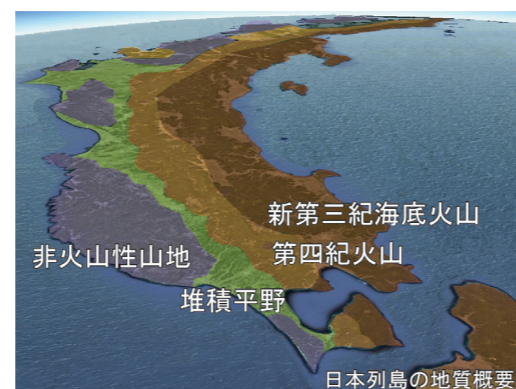
下北の地質や生態系、文化などを地域内外の研究者に調べてもらうことも、ジオパークでは重要な活動です。平成 29 年度からは研究者や学生による、下北ジオパークをフィールドとした研究を支援しています。

日本列島を形づくる大地の特徴が「まると」楽しめます

日本列島の大地は、長い時間をかけて形成された 4 つの地質で構成されています。

4 つの地質とは、付加体、日本海拡大期の海底火山、第四紀の火山噴出物、市街地が広がる平野のことです。

下北は日本列島を形成するこの 4 つが全て集結している珍しい地域なのです。



津軽海峡が生んだ、生態系の北限

多様な地質と海が、動植物の生態系や人々の暮らし方に大きな影響を与えています。地質の違いは、土壌を通じて植生に影響を及ぼします。海底でも、海藻の根付きやすさは地質によって異なります。また、約 2 万年前、ユーラシア大陸と北海道は陸続きであったのに対し、津軽海峡の深さにより北海道とは陸続きにならず、島だった本州の動物は独自の分化を遂げました。これにより、本州最北端の下北を分布の北限とする動物が多く見られます。

3つの海に囲まれた暮らしと文化

太平洋、津軽海峡、陸奥湾に囲まれた下北半島では、主幹産業である漁業や観光業はもちろんのこと、北前船や海軍の歴史文化的背景から、全国屈指の魚介類消費量を誇る日常生活に至るまで、人々の暮らしと海は切り離すことができません。

一方、農地や学校などに活用される段丘地形、人々の信仰を集める霊場「恐山」など、海と生きる私たちの暮らしは多様な大地に支えられています。



下北ジオパーク認定商品発表会

「下北だから」生まれた逸品たち

地元の素材を使用して製造された食品や工芸品などから、大地とのつながりを感じられる商品を「下北ジオパーク認定商品」として認定しています。

企業や団体の皆さんの熱意と技術から生まれた商品たちを、たくさんの方々手に取っていただいて「楽しく」「おいしく」ジオを感じてもらえればと思います。



下北ジオパーク学習・活動発表会

地域を知り 地域を好きになる

子どもたちに下北を知り、好きになってもらうため、各学校でジオパーク学習を行っています。平成 29 年度からは下北の子どもたちが集まり、ステージ発表やポスター展示を通してジオパーク学習の成果を披露する発表会を開催しています。



下北ジオパークサポーターの会が主催した「しもきた漂着物展」のようす

下北ジオパーク サポーターの会

下北ジオパークを盛り上げるべく設立された「下北ジオパークサポーターの会」では、海岸の清掃活動や漂着物展などの保全活動を実施しています。他にも「下北(ジ)おでん」などのグルメ商品を企画するなど、住民主体のジオパーク活動を行っています。

認定までの道のりを辿る



ジオパーク構想のはじまり

下北がジオパークを目指したきっかけは、平成 19 年に発行された「日本列島ジオサイト地質百選」に、県内からは「恐山」と「仏ヶ浦」の 2 地点のみが選ばれたこと。これにより「ジオパーク」という言葉が下北地域で認識され、平成 21 年からジオパーク活動について本格的に調査検討が始まりました。調査を進めると、ジオパークとは地質だけを資源とするのではなく、大地・自然や人々とのつながりを教育や経済活動に活用する素晴らしい地域振興策であることが分かりました。

平成 25 年 1 月に設立された「下北半島ジオパーク構想推進協議会」へは、下北地域で地質の研究を長年行っている下北自然史研究会の奈良正義氏や、国立研究開発法人海洋研究開発機構むつ研究所の渡邊修一氏、国立大学法人弘前大学などの学術面の有識者の他、市町村教育委員会や県、民間団体など幅広い団体に参画いただき、本格的にジオパーク認定を目指す体制が整備されたのです。

加盟申請、そして見送り

平成 26 年、日本ジオパーク委員会へ加盟申請書を提出、下北半島ジオパーク構想の活動についてのプレゼンテーションを横浜市でおこないました。

その後、8 月には日本ジオパーク委員会の審査員を迎え、取り組みの状況を実際に見てもらいました。

「下北の雄大な自然に触れてもらえれば認定される。」多くの関係者がそう考えていましたが、結果は「認定見送り」。その要因は、地域住民へジオパークが浸透していない点でした。

しかし、この見送りが、地域が一丸となりジオパークをみんなで考えていくきっかけになるターニングポイントでした。



平成 26 年 8 月の現地審査の様子



上下北ジオパークサポーターの会長の小田桐隆夫さん。下北グルメジオ定食。食材はもちろん、箸や器まで下北産にこだわった人気メニューだ。

行政主導から民間主導へ

「ジオパークは行政がやるものだと思っていた。認定見送りと聞いてショックを受けた。」と語るのは、小田桐隆夫さん。

小田桐さんは認定見送り後、住民の側からもジオパークを盛り上げていこうと立ち上がり、海岸へ流れ着くゴミの清掃活動や、ジオパークの勉強会を行いました。

室戸世界ジオパークを視察した際は、地元企業の車にジオパークのデザインが施されていたり、「ジオカレー」を提供しているお店があるなど、住民がジオパークにそれぞれの立場から関わり、盛り上げていることに衝撃を受けたそうです。

「下北でも同じように盛り上げていかなければ」と考え、自社の車に鯛島のラッピングを施したり、地元のお店にジオパークグルメの開発を促す活動を行いました。

そうした活動の甲斐もあり、平成 27 年 7 月には下北初のジオパークをモチーフにしたグルメが誕生。その名は「下北グルメジオ定食」。下北の食材をふんだんに使用した人気メニューです。他にも、地域の見どころなどを一丸となって考える住民会議が開催されるなど、ジオパークの推進体制が行政主導から住民主導へとシフトしていきました。

2 度目の加盟申請

こうして、住民たちがそれぞれのジオパーク活動を展開していき、ジオパーク認定への期待が確実に盛り上がりを見せてきた中、平成 28 年、2 度目の加盟申請が行われました。

前回と同様に公開プレゼンテーションと現地審査が行われるなか、前回と明らかに違ったのは「住民の熱意」でした。1 度目のプレゼンテーションが市長の発表のみだったことに比べ、市長だけでなく、田名部中学校の生徒など、様々な立場の方々がジオパークを生かした取り組みを中心に発表を行いました。現地審査においても住民と審査委員が意見交換する場を設けるなど、住民がジオパークに取り組んでいることを中心に説明をおこないました。

祝！下北ジオパーク認定

住民がそれぞれの立場でジオパークに関わろうとしている点などが高く評価され、平成 28 年 9 月 9 日、下北ジオパークは晴れて日本ジオパークに認定されました。認定後も、住民の方々が主体となった各種活動が行われています。住民の皆さんがジオパークを通して下北の素晴らしさを知り、地域に誇りを持つことが下北の明るい未来へと繋がっていくのだと思います。活動を通じた持続可能な地域づくりを目指して、今後もみんなで「下北ジオパーク」を盛り上げていきましょう！



平成 28 年 9 月 9 日の認定審査報告会には約 400 人が集まり認定を喜んだ。